

環境アセスメント部の活動状況

吉 海 潮*

当協会の環境アセス部が発足してから早くも一年が経過しました。この間、生物部門、調査部門、アセス部門の3部門が時に応じてプロジェクトを組み、部内は勿論、部間においても緊密な連繋を保ちつゝ努力してきました。この一年間に取り組んだ主な事業としては、博多湾埋立アセス、白島及び上五島石油備蓄関連環境調査、三池港湾環境アセス、津水湾環境アセス、南薩池田湖周辺河川水質調査、唐津湾内離岸堤関連調査、海底沈下に対する漁場回復の検討、醸酵廃液洋上投棄の影響調査、宮田・若宮地区内陸工業団地環境総合事前調査、大分市小中島地区の悪臭実態調査等々があります。

限られた人数で与えられた調査内容を完成することは我々にとってかなり苦しいことではありましたが、職員一同使命感に燃えて遂行してきました。

博多湾アセスでは、水質、底質、海生生物調査や陸上動植物調査、大気・騒音測定などの現地調査のほか、野鳥、干潟の環境保全対策の検討を行いつゝあるところです。この中で、埋立計画に伴う野鳥保全対策の検討は、博多湾では初めてであり、また全国的にみても事例は極めて少なく、検討の進め方そのものから論議しなければならない状況でしたが、現在野鳥が利用している海域、干潟、磯浜及びあし原・湿地毎に埋立による生息環境の変化や、影響度合の強弱に応じて鳥類を四区分し、これらと消滅する生息地との数的関係を調査し、なお、保全対策の方法として対策の種類や保全に必要な規模、対策を講ずる場所等について検討を行なってきました。今後は引き続き、野鳥以外の生物、景観、レクリエーション及び計画地周辺の土地利用状況、将来の土地利用計画等と野鳥との関係についても考察していく予定ですが、野鳥と干潟等環境との関連調査はなかなか興味深いものであります。

海底沈下に対する漁場回復の検討は、有明海海城における海底沈下について、復元素材としての砂質岩盤の投入が生物環境及び漁場環境に与える影響を検討するもので砂質岩盤の粒度組成、物理的性質、沈降試験、成分試験、溶出試験、さらにガザミ、シバエビ、モガイ、アサリを供試材料とした生物試験を行ないました。また、当該域がノリ養殖漁場となっているので、ノリ竹の建込みと底質の関連などについても調査検討しました。上記の各調査結果を総合すると、溶出試験結果から砂質岩盤の溶出成分が漁場環境に悪影響を及ぼすこともなく、また、生物試験結果からもこれらの生残及び挙動に影響を受けることもないので、魚介類への悪い影響は考えられないようあります。また、ノリ竹も現在のカキ殻混り漁場及びカキ殻投棄漁場でも建込みが行なわれていることと比較しても、砂質岩盤漁場でノリ竹建込みが困難であるとはいえ

* 当協会環境アセスメント部長

ません。以上のような理由で、漁場復元素材として砂質岩盤を使用しても、魚介類、ノリ養殖、漁場環境等に及ぼす影響はほとんどないものと考えられます。

このような海生生物及び漁業操業との関係等を調査検討することは、当協会独特的活動分野であると自負しておりますが、広く関係各位にお役に立てば望外の喜びと思っております。

〔 地 球 上 の 人 間 〕

今地球の質量が若しも現在の 2 倍でなく平均密度が変わらないなら表面重力は 1.26 倍となり、陸上生物の重心は頑強でより低く、生物進化の過程も、海から陸に移る時期もかなり遅れることが考えられる。又海の波のしぶきは、はね上らず、海の蒸発量は減少し、大気はもっと乾いて雲の高さも低くなり、天気のパターンは一変するであろう。

逆に地球の質量が現在の $\frac{1}{2}$ 倍であると、表面重力は現在の 0.79 倍で、生物進化の歴史は変り、稀薄な大気・降水の侵食作用は減少する。そして生物進化は速められ、その人類はひょろ長く変ったものになるであろう。

又地球と太陽の距離が 10 % 短かいと地球全表面の 20 % (南北半球の夫々 $45^{\circ} \sim 65^{\circ}$ が居住地帯) しか住めなくなり、南北半球別々に生物が進化したかもしれない。又逆に 10 % 太陽が遠くなると今 (60°) より狭く南北 45° までとなる。

このように少し地球条件が变っても大きい環境変化がある。そこで現在の我々の住み良い地球環境をうまく保存し、又資源も大事に使う工夫が必要ではなかろうか。

(坂上 務)
